

# ●白州だより

2012年2月4日  
二十四節気 立春  
発行 白州郷牧場  
山梨県北州市白州町横手 2259  
TEL: 0551-35-4520  
FAX: 0551-35-2970

白州郷牧場からの冬のおたよりをお届けします! <http://www.hakusyu.jp/> [info@hakusyu.jp](mailto:info@hakusyu.jp)



「きらら冬の学校」2012.1.6

## 「2012年を迎えて」

白州郷牧場グループ代表 椎名盛男

見田さんに勧められて、本当に久しぶりに宮本輝の小説「三十光年の星たち」(毎日新聞社)を読む。宮本輝の小説は「あの人を見つけたのは～」ではじまる。「錦繡」(新潮文庫)以来読んでいなかった。

彼の文体は、平易なものに――読みやすいものに変わっていた。小説は三十年という歳月をテーマにしていた。そして大人の青年に対する責任についても。青春を卒業したばかりの青年にとって、三十年後の自分など想像が届かない。しかし、届いた青年たちがいた。彼らは親の背を見てオウム信者になった。六十才を越えれば三十年の歴史の意味は手に取るようにわかる。と、同時に三十年後の自分など考えても仕方がないことも。

三十年といっても、この間亡くなった立川談志師匠の言葉を借りれば「人生、喰って、飲んで、やって、眠って、ハイおしまい」なのだろう。

人間が、自分の人生のテーマも持たず、ただ、生活して

いるということに驚いたのは、四十二才の時だった。ひどくショックを受けたのを今でも覚えている。三十年は長すぎるようで短い。人生の三分の一は眠っているわけだから、三十年といっても二十年である。その二十年も無智の世界(煩悩の世界)に暮らすのなら、目的意識的に過ごす人間的な時間は圧倒的に少ない。

それを人生と呼ぶのだろうか?人間的に生きるとは、暇なときはひどく暇で、忙しいときはひどく忙しいだけなのかもしれない。

私たちの世代は、後輩を育てないと叱られた。事実である。育てられたことがないから、育て方も知らないのである。

日本人はいつから後輩を育てなくなったのか。私の不確かな推測によれば、ロカビリー世代(日本で初めてジーパンを着た世代)からではないだろうか。我が身かわいさの起源も(彼らはそれを個人主義と言い訳した)そのあたりではないのだろうか。

かって、六十年代後半の若者の反乱が、幻想の市民社会に向かって雪崩れうって潰走していた。そして、経済

の成長神話、原発の安全神話をもって高度成長、バブル、を駆け抜け、3.11の洗礼を浴びた。

今、彼らの目の前に広がっているのは、暗黒大陸である。もう我が身かわいさでは、この大陸を生き延びられないだろう。「人間は集団構成員である自覚を欠いたとき、個人(人)であることをやめる。」(エマニュエル・トッド)という。

牧場にとっても人ごとではない意見である。

かって潰走していく背後から、盲目の人の子守唄が挽歌のように聞こえた。

「およしなさいよ、無駄なこと〜」(座頭市の唄)  
事実そうだった。



## 2012年の抱負



「子供たちに将来の夢を与えられるような年にしたい。」と昨年頭のきら新聞に書いた記憶がある。

何もせぬうちにあの大地震、取り返しのつかない原発事故。夏には熊に襲われるというおまけまでついた。

どうにも夢どころではない、悲観することばかりだった。

幸いここ白州は、地形のおかげが放射能汚染は受けていない。水、空気、土が汚染されていなければ農業は続けられる。

今年はよい年にしたい。何でもいい、年末に「今年はよかったねえ」と、皆と笑える年にしたい。(若杉 俊明)

### 「それでも前向きに進む」



3月11日の震災に始まり、大きな試練と変化の与えられた2011年。原発問題による人々への健康被害は現在進行形で進んでいる。

夏の学校で見た東京の子供たちのいつになく解放された姿を目の当たりにして、「子供たちが裸足で入れる畑をつくる」ことを「続ける」ことしかないと考えた。

人々のお財布は極端に硬くなり、食の品質はピンキリの超格差が発生する予感。いろんなことが決まろうがそれでもこのやり方で農業を続ける。いい意味でのアホさ加減が必要に思う(もちろんそれで食べていくことを忘れてはいけない)。

ここ数年の心身ともに疲労困ぱいを持ち前のガッツで(笑)何とか明るく過ごし、長かった厄年がやっと終わろうとしている。一緒に働くみんなと、年に数回会う大先輩方の楽しそうな顔のおかげだ。

自分を大事にして仲間や身近な人を大事にして、地域の人たちにかわいがってもらい恩返しをする。自分たちの手でモノをつくる力・生きる力をつける。遥かなる理想かもしれないが、時々考えると楽しくなる。そして課題はその

楽しさを多くの人にライフスタイルとして提案できればいいかなと思う。

ということで、現在の仕事を成熟させることと、自分自身の充実を今年の抱負にあげたいとおもいます。

(坂田 裕美)



今年の抱負を書かなければいけないのですが困ったことに、前向きな言葉を語ることがなんとなくためられます。おいしい野菜をもっとたくさん作り、一人でも多くのお客さんに白州の野菜を味わって欲しい。

こうした思いは常日頃から持っているのですが、のどにささった小骨がつかかかのように、それを公言しようとすると言葉が喉の奥の方へと押し戻されてしまいます。今の日本で、向上心をもっていられること、いや、当たり前のように日常を生きていられることは、幸運なことなのだ、そんな考えが頭をよぎります。

「がんばろう日本」、「がんばろう東北」という、前向きな言葉が世間でよく聞かれます。しかし、こうした言葉は、実際に傷つき損なわれた人の心に届くのでしょうか。気まずい沈黙に耐え切れず、なんとかそれを穴埋めしたいがために発せられる「空語」のようになっていないでしょうか。傷ついたのが「私たち」ではなく「彼ら」だったことに対する疚(やま)しさが、「私たち」を前のめりにさせている、そんな風に見えます。「彼ら」との隔たりを何とか埋めようと、情動的に寄り添ってあげようと、私たちを必死にさせる。しかし逆に、その前のめりな姿勢が、隔たりをより深刻なものにしていけないでしょうか。

無傷であることの疚しさを感じつつ、かといって今ある生活を放棄するわけにもいかない。そんな私ができることとは何なのでしょう。おそらく、私が今いる安全地帯を、安全地帯のまま留めておくように努力することだと思えます。誰かが足を滑らせないために雪かきをするように、事故や悲劇の招来する可能性を、完全に除去はできなくても、防ぐ努力を怠らないこと。そうした地道な努力の積み重ねによって安全地帯、いや社会はなりたっています。もちろん、3・11の大津波のように、圧倒的な自然の力によ

て、その努力が押し流されてしまうこともあります。しかし、そのような光景を目の当たりにしてもニヒリズムに陥ることなく、私たちが生きている〈場所〉の安全を維持するための仕事を、黙々とこなしていくことが大事なのではないでしょうか。

いつの日か、傷ついた人がこの〈場所〉を訪ねてくるかもしれません。そうなることを期待することなく、しかし、そのようなことがあるかもしれない、と備えておくこと。頼まれて待つのではなく、事前に予告すらされない他者の訪れを「待つ」ための〈場所〉。この白州郷牧場が、そのような〈場所〉であるために努力をしていくこと、それこそが私の仕事なのだと考えています。 **(内藤 光)**



明けましておめでとうございます。去年も大変お世話になりました。この度、東日本大震災で被災された方には心よりお見舞い申し上げます。震災の爪後は未だ解決にはほど遠い日々が続いておりますが、今年一年、

気持ちを新たに仕事に励んでいきたいと思えます。去年は風邪を引くことが多くあり、現場にも迷惑をかけましたので、今年はず、「健康」に気をつけていきたいです。また病気に対してもそうですが、この度の原発事故に伴い、内部被爆の不安が今後とも続いていくことになると思えます。そのため、白州郷ではその対策として「被爆食」として味噌や玄米といったものを食の中心とし、食べることで内部に入った放射物質を体外に排出し、抵抗力をつけていく取り組みを事故以来始めています。また今年にはニンニクを植え、味噌に混ぜたニンニク味噌を試作し、少しでも対策になる食作りを考えています。

健康でいることで仕事にしっかり向き合うことができ、日常生活を充実していくために、日々の食生活を大事にしていきたいと思えます。

食べる物をはじめ、不安な環境が続きますが、みなさんも健康で元気に過ごしましょう。今年も宜しくお願いします。 **(岸 直樹)**

今年は加工場での作業をがんばっていききたいです。

加工場での主な作業は麴作りや味噌作りや漬物などいろいろありますが、自分は主に麴作りと味噌作りをやっていきます。覚える事がたくさん

あり大変ですが楽しいです。

麴作りでは 100 回、麴作りを目指して現在がんばって

作ってます。

加工場で任されることも増えてくるのでしっかり覚えて技術を身に付けたいです。

麴作りでは温度管理などなかなかうまくいかない事もあり麴の温度が上がり過ぎることもあり大変です。

今年は温度管理をしっかりやっていきたいです。

味噌作りでは豆の煮る時間やアクとりなど難しく早く上達するようにがんばっていききたいです。

味噌が出来上がるのが一年後なので、おいしく出来ているかも楽しみの一つです。

これからは加工場の仕事が増えてきますが、一つ一つ覚えて加工場を支えていきたいです。

今年もヒヨコを育てています。まだ二回目ですが不安なところもありますが、去年学んだことをいかしていきたいです。

去年はヒヨコの成長が遅かったので今回はエサや水などを気をつけてやっていきたいです。

ヒヨコが成長して卵を産み、それを採卵出来る日を楽しみにがんばっていききたいです。

畑・ヒヨコ・加工場と忙しいですが充実した一年にしたいです。 **(阿部 孝)**



去年の抱負は「部屋の整理」でしたが、今年は「貯蓄」です。

2012 年は、何か一発ぶちかましたいと思っています。よろしく願います。 **(白崎 森夫)**



まず個人的な抱負として、昨年の夏、雨よけハウスでやったミニトマトを昨年以上に頑張る事です。昨年は初めてで右も左も解らず自分自身もなくなるとなくという感じでやっていたので何もしないで終わってし

まった印象がありました。

定植が牧場のミニトマトより2週間くらい遅れたことや、灌水のタイミング、誘引の仕方、芽かきのタイミング等々すべてが試行錯誤の連続でした。

金額的にもうまくやればもっといいと思います。

今年はハウスが2棟になるので少々不安もありますが単純に昨年の倍以上は収穫したいです。しかし今年2年目という事で昨年と同じ失敗を繰り返さないように、昨年の教訓も生かしながらやっていきたいと思えます。そのうえで皆に美味しいと言われるようなものを作れるよう頑張りたいです。また、時間があればミニトマト以外の品目もいろいろとチャレンジしてみたいと思えます。作物を収穫するまでの一連の流れ的なもの（土壌分析、耕うん、播種、

敵立て等々)を自分一人でも出来るようにならないといけないと思います。

それと牧場の仕事全般について、畑仕事はもちろんの事、それ以外の鶏舎関係の仕事だったり、パックセンターの仕事やBMW関係の事など覚えなくちゃならない事がまだまだ沢山あるので徐々にではありますが今年1年を通して覚えていきたいと思っています。**(竹内 崇)**



2010年7月に埼玉県より移住して、主人は農作業、私は事務仕事をさせていただいております。

早いものであつという間に1年半が過ぎ、仕事も皆さんに迷惑が掛からない程度に成長しているだろうか?と思いますが、とにかく自分なりに頑張ってきました。

昨年の6月、主人が会社からビニールハウス1棟分の土地をお借りし、牧場のスタッフにご指導をいただきながらミニトマトの栽培を始めました。

農作業経験なしの私はお手伝い程度にと考えておりましたが、その考えはとても甘く農作業は大変でした。力、体力がほしいと思いました。

鍬を持つての作業、定植する為の穴あけ、伸びてきたトマトを誘引する為の支柱立てなど・・・次の日は筋肉痛になりました。

うれしいはずの収穫も、座ったり立ったりの繰り返し、ずっと中腰での収穫、膝と腰を痛めることもありました。

台風が接近して大雨が降った次の日、沢山のミニトマトが割れてしまっていたり、虫たちに沢山食べられたりと悲しい思いもしました。

でも楽しい事も沢山ありました。農作業中、割れてしまったトマトを頬張ったり、トマトと一緒にバジルも所々に植えていたのでバジルの香りに癒され、沢山の虫たちに出会い(苦笑)、体を動かして仕事をする心地良い疲れ、お隣の畑の方からお野菜をいただいたりと。

そして何よりも嬉しかったことは、『おいしい〜!』と喜んでいただけ一言にとっても助けられ励まされました。

今年は、昨年の倍に増やしビニールハウス2棟分の広さでミニトマトの栽培を頑張ると主人が言っております。本当に大丈夫だろうか?

でもそれに向かって今から準備を始めています。

今年も沢山の方にミニトマトを食べていただけるよう『やるしかない!』と決意を固く今年の抱負を書くことで、今年も一年頑張りたいと思います。

5月くらいから野菜の収穫で忙しくなると事務仕事も忙しくなります。

焦らされることなく、できる限り迅速かつ丁寧に事務仕事も頑張ってきました。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。**(竹内 加代子)**



## キララの冬の学校が開催されました。

今年、平成24年・冬の学校から、キララは(株)白州郷牧場の「文化事業部」の企画として始めることになりました。

この数年、「キララの学校をどうするか」、税務上の経理処理の問題があり、NPOのような独立した機関・組織にしたほうが良いのではないかという可能性も検討してきました。しかし、キララに係る人材を始め財政や経済的なこと、物理的フィールドなどの現状を直視すれば、「キララ」単独での活動維持は考えられない。30年近く「農と子どもたちの成長に深く関心を持つ」人々の意思と関係性の中でやってきたのですから。

3・11以降、白州での放射能汚染は奇跡的に無く、その段階で、生産活動を主な目的とする(株)白州郷牧場の利点を最大限活用すること、そこでの「文化事業」の可能性に希望を見出そうという結論に達しました。



最初の冬の学校は、8人の子どもたちと牧場スタッフ・秋山校長・高橋先生、加古さんの参加で行うことができました。

年始の甲斐駒神社参拝から始まり、餅つき・味噌仕込み・鶏をさばくこと、農作業は、サニーレタスの播種・白菜の収穫・玉ねぎの追肥。食事は恒例のカレーライス、鶏と麴

の料理、搗きたての餅と雑煮、まだ芽生えていない野草を探しての七草粥などを頂きました。夜の講座は、高橋先生の「電気の歴史」若杉さんの「有畜複合循環農業について」見田の「発酵とは何か」でした。

福島原発の被害の実相が次第に明らかになるであろう今年から、大地と共に日々を生きる私たちが何を問い、なにを考え、子どもたちと何を守るのかという真価が試される時が続くでしょう。

昨年仕込んだ味噌や搗いた餅、自分で収穫した白菜などをお土産に持って子供たちは元気に帰って行きました。気持ち明るく元気に、私たち自身が力をつけてゆく他ありません。**(見田 由布子)**

